寄生から共生へ

先の研究会での三井先生のご質問は、私にとって（いささか大げさに言えば）「衝撃的」で、その場では的確に答えられず終わったものの、この夏あれこれ考えてきました。

主体主義の哲学などというものを半ばバカにして、ベルクソンやホワイトヘッドとともに、それからの離脱を心がけてきたものの、知らず知らずのうちに主体性の哲学の轍に嵌り込んでいた部分が私にはあったように思います。多様性の論理を言祝ぎつつも、それを単純化していた側面があった。

企業を１つのアクチュアル・エンティティとして、いわば準主体として把握するのには避けがたい一面があるのですが、その老いと劣化を含めて総体として捉え直そうとするとき、それを単純に《１なるもの》と見なすことは許されない。三井先生の問いは、まさに社会科学からの深刻な問いだったように思います。

名のある企業が２代、３代と代替わりして、最初にあった推進力、いわば「エラン・ヴィタル」を失うことは何ら珍しいことではありません。ごく小さな会社であれば市場からの退場を余儀なくされるでしょうが、一定規模の企業だと、なかなかそうは行かない。利害のある関係者が沢山いて、名前だけでも生き延びさせる必要に迫られる。創業家を放逐し、銀行から経営者が送り込まれたりする。

そのとき企業は元の企業と同じだと言えるのか。違うとすれば、企業の自己同一性を、その固有性をどう捉えるべきか。これは安直な回答を許さぬ問いです。会社は経営者のたんなる所有財産にあらず、社員全員のもの、取引先全員のもの、また言うまでもなく株主のもの、顧客や消費者のものでもあります。複数の関係者により共有され運営される協働体であるからこそ、それは有機的な組織体なのです。

ならば会社ひいては企業の固有性および主体性とは奈辺に見出されるべきか。あるいは、そんな七面倒なことを考える必要はないのか。

これは平俗に言えば「ブランド価値」の問題で、そもそも《名》もなき企業は存続を許されない。それが資本主義の掟と言ってもよい。その傾向はいよいよ強まりつつある。しかるに、守られるべき名声ないし名望とは何か。実体としては「ゾンビ化」しても、なぜそれを護持されねばならぬのか。単に関係者の利害のためか？

とりあえず企業は、実質として動く水準と、名で動かされる水準があると言えそうです。両者のバランスが取れ、一体として動いている企業は活きている。実質が衰え、名ばかりになった企業は死んでいる。あるいはゾンビ化を余儀なくされている。

ところが、すべての企業が名もあり実もあるという訳には行きますまい。経営に浮沈があるのは常態で、名と実の間で行ったり来たりしているのが企業社会の実態であろうと思われる。ある意味すべての企業がどこかゾンビ的な傾向を持つと言えなくもない。資本社会の荒波をぷかぷか漂っている。真っしぐらに主体的に前進する企業など、そう多くは有りますまい。そう考えると、むしろ企業とは本来的にゾンビ的存在なのではないか。

これはミッシェル・セールの言葉を用いて言い換えると「寄生的」ということです。企業は社会の中で――社会的関係の網目の中でしか生きられない。企業が脆弱で、時に呆気なく潰れてしまうのは、たんに経営者や社員の努力が足りないからではなく、それが社会に開かれ、同時に社会の人質になっているからです。企業は社会に寄生することで命脈を保つ。社会の変化に付いて行けなくなれば、いかに大企業であっても、かつて恐竜がそうであったように敢えなく滅ぶ。企業とは社会の寄生体なのです。

そもそも文明自体が自然の内に――地球環境の内に寄生しているのだとセールは見る。何のことはない、人間とは自然の内なる寄生虫に過ぎないのです。身の程を知らねばなりません。

このことは３・１１で大地震＆大津波に襲われ、なすすべもなく原発災害に見舞われた日本人には自明なことのはずです。私たちは自ら生み出した技術すらコントロールできない。ましてや自然を支配することなどできるわけがないのです。ひとたび酷暑の夏になるや、都市生活は生存の危機に瀕する（少なくとも私はそうでした）。それが私たちの文明の実相です。

社会生活においても私たち個々人には何の力もない。私たちは社会の中で法に守られてようやく食いつないでいる。社会の中で浮遊する私たちは、何やら頼りない《名》を頼りに、ようやく社会と繋がれているにすぎません。首長の命じるままに給料をカットされる。研究費は削減される。研究生活など風前の灯火にすぎない。

自立した近代的個人の存在を金科玉条とする現代社会とは一面で途方もなく不安定な社会であり、ひとたびセクハラやパワハラで名声を失えば一気に凋落する。そして、やり直しは許されない。どんなに驕り高ぶって見せたとしても、私たちは社会の寄生者にすぎない。誰もが似たり寄ったりです。安倍晋三だけは例外ということにはなりません。それどころか、アレこそまさに社会の寄生虫の最たるものです。むしろそこに凄みがある。

企業は多数のメンバーからできた集合体であり、統合体であり、協働体です。そのメンバーは無数ではなく、自ずと枠が決まっている。限られたメンバーから多様な意思を絶え間なく吸い上げ、１つにまとめようとする。そのとき意思の統一がなければ仕事にならない。たえず決断し、前進せねばならぬ。

同様に主体も、いくつもの意思と思念、感情と感覚の統合体と言える。私たちは法的に１つの名を持ち、それにより社会の舞台に呼び出される。が、舞台袖で寛いでいる時は、この統合作用、いわば社会的動員から解き放たれている。私たちの人格の複数性がそこに現われる。１つの名の下に幾つもの人格が浮き出してくる。

私たちは父や母の元でその人格を模倣しつつ受け容れた。兄弟姉妹と共に、両親の人格を模倣しつつ受け容れた。友人や先輩、先生の振る舞いや考え方から意識的・無意識的に無数のことを学んだ。人格は複数的です。それらの多様な人格を統合しながら私たちは生きている。それらを1つに束ねるべく強いられながら、社会に寄生しながら、にもかかわらず社会とは別の生き物として活きている。「活かされている」と言うべきかもしれません。

いまや私たちの肉体にしても同様のことが言えます。医学と医療技術の進歩により、人体の殆どあらゆる部分が移植可能になっている。腕や足を機械に置き換えることも可能です。iPS細胞を増殖させ、必要な個所に移植することも近い将来できるようになるでしょう。

私たちはどんどん死ねなくなっている。死にたくても死なせてもらえなくなっている。先のゾンビ企業と同じです。まわりが生存を望めば、なかなか自分から死ぬわけには行かない。その時この私の意思はどうなってしまうのか。誰が私の体の主人なのか。

協働体という概念は誤解を招くかもしれません。私たちは何も働くために生きているわけでは豪もないからです。個人が老い、死んで行くように、企業もまた老い、衰えて行く。永続する企業などない。私たちは共に働くばかりか、共に老い、共に病み、共に死んで行く存在なのです。

現象学的社会学のアルフレッド・シュッツには、この「共に老いる存在」にかんする議論が（ほんの僅かですが）あります。それを捉えて廣松渉は「偕老同穴」の理論だと茶化している。実際にはかなり重大なテーマです。いまや人類全体が共に老いつつあります。地球規模の偕老同穴の理論が必要とされているのではないか。

＊

個人の糾合体である企業もまた、同様の内的複数性を持つ。個人同様、その意思は社会ひいては国家により牽制される。国家は国際社会に牽制される。

これまで貨幣の動きは、もっぱら国家レベルで統制されてきた。が、近年の仮想通貨およびブロックチェーンの動きは、金融経済において国家単位とは異なる統合の動きが出てきたことを意味する。仮想通貨は国家とは別の、局所化された集団の意思により統御される。

それはある意味で国家からの自由を意味しますが、別の意味では個別集団の意思により貨幣の価値が左右されることになる。そこに都合よく「神の見えざる手」が働いてくれればいいですが、そもそも「神の手」なしでやって行こう、いや、やって行けると信じることで成り立つのが仮想通貨のシステムです。

ネットにおいて相互的な牽制により公平なシステムが維持されると期待するのは些か楽観的に過ぎ、そこに必ずや僭主のごとくその支配を狙う者が現われるに相違ない。システムの簒奪を狙う者が。それはリアルな国家の場合と同様です。

仮想通貨のブロックチェーンは、まさに寄生体のシステムだと私の目には映ります。それは国家的な貨幣システムに寄生することで利益を得る。この寄生的な経済を毛嫌いするのは無意味で、一面においてそれは既成の経済システムを相対化し、健全化するのに役立つことでしょう。たとえば外国に日本の大手銀行を介してお金を送ろうとすると、途方もなく理不尽な手数料を取られる。仮想通貨を用いるなら殆ど無料で済みます。

そこらの事情はネットの発達で情報の流れが相対化され、それを健全化するのに一役買ったのと同様です。

その反面、ネットの裏側でフェイクニュースが跳梁し、現実社会を歪めつつあるのも事実です。意図的にフェイクニュースを大量に流し、政治的な主導権を握ろうとするグループが出てきた。そんな「陰謀」が世界規模で行なわれている。

同じことが仮想通貨においても生じるでしょう。いかに高度な技術を駆使しても、その裏をかく人間集団は必ずや現われます。現に「贋金使い」が至るところで跳梁跋扈しつつある。

いつぞや小川健先生とも打ち上げの席で話したことですが、国家経済とブロックチェーンは、おそらく最終的には共存共栄を目指さねばならない。共生しつつも相互に牽制し合い、特定のグループに奪取され専横されるのを拒まねばならない。ここでも必要なのは統制する1つの主体ではなく、協働する複数の主体なのです。

そして、その協働は公共空間の脱構築を目指さねばならない。特定集団の利益ではなく、人類全体に奉仕する理念が共有されねばならぬ。

実際のところ人類は、そうした「公共善」へ向かう傾向を生来持っているように思われる。そうした心根がなければ、他の動物やネアンデルタール人との競争に打ち勝ち、生き残ることはできなかったはずだ。進化論的生物学＆人類学が、世の始めから人類には公共善への意志があると明らかにしています。

たとえば歯が無いにもかかわらず生き延びた初期人類の遺骨が発見されている。まわりの人間が彼に食べるものを与えていたと見なすほかない。彼らは共に狩りをし、働き、生活するばかりか、共に老い、死んで行ったのです。公共善は、こうした同胞への気づかいと共感、ようは「隣人愛」に依拠せねばならない。それは何も論理的要請ではないのです。

問題なのはそれを捻じ曲げ、自集団と他を峻別し、特定の集団や国家へ利益誘導する文明の威力が働いていることです。私たちを分断し、切り離す、誤った「哲学」に私たちは支配されている。それはまさに哲学の問題だと、私はミシェル・セールから学んだように思います。

個我や特定集団、ひいては国家に縛られることなく、私たちは人類全体を目指さねばならない。隣人愛に自足することなく、人類への愛に目覚めねばならない。のみならず他の生き物や生命への愛、地球愛、宇宙愛へ飛翔せねばならぬ。まことの普遍的な愛へ到達せねばならない。そのためには悪の本性を知り抜く必要があるでしょう。悪の起源には弁別的な理性が、それに由来する《法》が存在する。

公共善の探究は美しい夢を語ることではない。それは美も醜も、善も悪も、真も偽も切り離すことなく包摂せんとする営みです。

これをきれいごとだとか、世迷いごとだとか思うかぎりで、私たちの文明の終焉は近い、おそらく世人が思っているより遥かに近いでしょう。というのも、すでに悪の方は地球をすっかり覆い尽くしているからです。これに抵抗し、その向きを変えさせ、自らに包摂するには、いたずらに正義を説くだけではとても足りません。人類がこれまで経験したことのないような愛を、いわば「愛のエラン」（ベルクソン）を自らのうちに見出さねばならない、それに目覚めねばならないのです。